

麦類さび病類

赤さび病、黒さび病、小さび病、黄さび病の総称であり、各病害の特徴は下記のとおりである。本県ではさび病類の発生は少なく、わずかに赤さび病が見られる程度である。

病名	原因菌	寄主植物	夏孢子層の特徴
赤さび病	<i>Puccinia recondita</i>	コムギ	赤褐色が点在 (写真 1)
黒さび病	<i>Puccinia graminis</i> subsp. <i>graminis</i>	コムギ オオムギ	濃褐色が点在
小さび病	<i>Puccinia hordei</i>	オオムギ	赤褐色が点在
黄さび病	<i>Puccinia striiformis</i> var. <i>striiformis</i>	コムギ オオムギ	鮮黄色が条状

1 病徴

各病害で共通して、葉（黒さび病は稈にも）に鉄さび色を呈し、盛り上がった粉質の斑点（夏孢子層）が生じ、次第に黒褐色の斑点（冬孢子層）となる。

穂数、粒数、粒重が低下し、収量低下を招く。

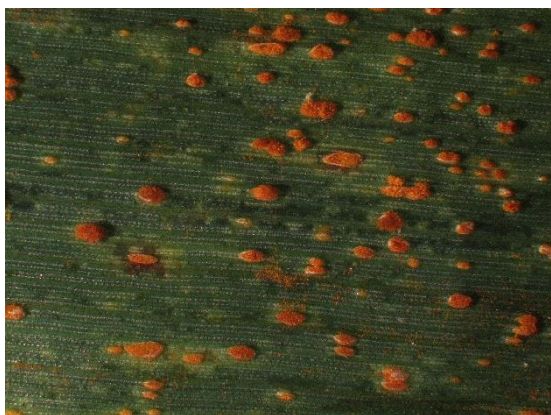


写真1 赤さび病夏孢子層

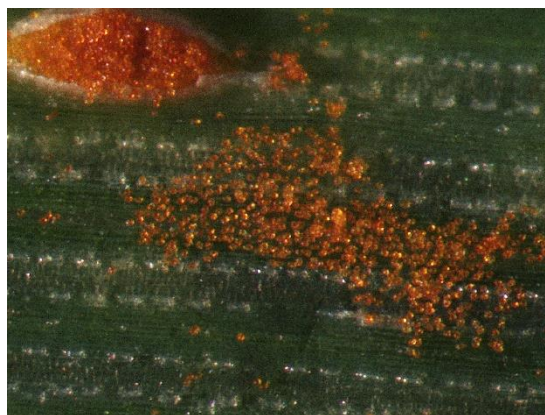


写真2 赤さび病夏孢子層拡大

2 発生生態

病原菌は、収穫後のこぼれ麦や被害茎葉で越冬し、播種された麦に伝染し、夏孢子層または菌糸で越冬する。

赤さび病、小さび病、黄さび病は、窒素の多用や早播き、また、冬～早春が温暖で麦の伸長が早い場合にも発生が多くなる。

黒さび病は、窒素の多用や遅播き、また、低温・乾燥により麦の生育が遅れると発生が多くなる。

3 防除方法

発生には品種間差があり、本県主力品種である「ゆきちから」と「きぬあずま」の赤さび病抵抗性は「強」である。

被害茎葉をほ場内から除去し、窒素肥料の多用を避け、適期に播種する。

薬剤による防除を行う場合は、初発時から7日間隔で2~3回散布する。

なお、ほ場内のスズメノテッポウでさび病が発生していることがあるが、これは原因菌が *Uromyces dactylidis* であり、麦類のさび病類とは異なっているので伝染源になることはない。